



『鉄鋌 (てつてい)』

古墳から出土する特殊な副葬品として、鉄ティと呼ぶものがあります。昨年の夢通信で紹介した宮山古墳からも数枚出土しています。これはバチ形の鉄の延べ板で、奈良県ウツナベ古墳陪塚（ばいちょう）の大和6号墳から大小872枚も出土しています。大形品は長さ30～40cm、小形品は長さ16cm前後です。鉄ティは主として武器・武具など鉄製品の素材として朝鮮半島から輸入（移入）したものです。近年の発掘調査で伽耶（かや）地域（朝鮮半島南部）の古墳からたくさん出土し、鉄の王国と呼ばれた伽耶からもたらされた可能性が強い。素材である鉄ティそのものが副葬されたのは、それ自体が富の象徴、ひいては権威の象徴と考えられたからでしょう。



それではいつ頃から国内で鉄を作るようになったのでしょうか。日本書紀に興味深い記事があります。大化改新前夜、642（皇極元）年4月の蘇我蝦夷（そのえみし）が、百済の使者を自宅に呼び、馬および鉄ティを与えた。これ以前に朝鮮半島から鉄素材である鉄ティを輸入（移入）したという記事がかなりありますので、これは逆さます。まずは畿内あるいは畿内の周辺地において、鉄の生産が行なわれるようになった証拠です。

そして、蘇我蝦夷が大量の鉄をかなり自由に扱えたということです。その鉄産地は近江か播磨ではないかと考えています。しかし、これ以前に日本の中で鉄の生産が行なわれていなかった、という訳ではなく、あくまで文献上の証拠です。この記事は恐らく、畿内周辺でもこんな立派な鉄が作れるようになったぞということを、これまで鉄ティを輸入（移入）してきた技術的な先進地である朝鮮の使者に、誇りをもって与えたのでしょう。

大化改新前後のこの時期は、国際的にも国内的にも、戦時体制的な要素をはらみ畿内を中心とする鉄生産がかなり急速に発達しました。

陪塚（ばいちょう）：大きな古墳（主墳）の周辺に造られた小形の古墳の中で、主墳に付属するような位置に計画的に配置され、かつ同じような時期に造られた古墳。

参考文献

倭国－邪馬台国と大和大権－ 1993年 京都国立博物館

文献史学から見た古代の鉄 福田豊彦

日本古代の鉄生産 たたら研究会編 1991年

『日本書紀』
皇極天皇元年四月乙未、蘇我大臣（蝦夷）、畝傍の家に百済の
翹岐等を喚びて、親ら対ひて語話す。仍て馬一疋、鐵二十鋌を
賜ふ。ただ塞上に喚ばず。

むらの鍛冶屋®

ホームページと電子メールをご利用ください。

URL <http://www2.memenet.or.jp/kinugawa/>

<http://www.kanamonoya.co.jp/>

ryou@memenet.or.jp



何でもお気軽にお尋ねください！！